

## 西ドイツにおける社会学史研究の一動向

— デイルク・ケスラーの所論を中心に —

白井英之

## 一 はじめに

現在の西ドイツ社会学を担うもつとも若い世代の一人であるデイルク・ケスラー Dirk Käsler (1944)、<sup>(1)</sup> ミュンヘン大学社会学研究所研究助手を経て、現在ハンブルク大学教授)は、そのマックス・ヴェーバー入門書<sup>(1)</sup>によってわが国でも知られるようになったが、このことからただちに、彼をヴェーバー研究者として限定的にとらえるようなことがあるとすれば、<sup>(2)</sup> それはケスラーの社会学研究を一面的にしか把握していないといってもよい。もとよりケスラーのヴェーバー研究は、社会学史の再構成をめぐる彼の考察をヴェーバーに適用した産物だったのであり、この点には十分注意が払われるべきであると思われる。というのも、彼のこうしたヴェーバー研究の原型をなした彼自身による編著<sup>(3)</sup>——これは、<sup>(4)</sup> *Konnt Augustie Comte* か <sup>(5)</sup> *Alfred Schütz* にいたる代表的社会学者の全体像を描き出している——の「緒言」において、編者としてケスラーは、社会学史研究が推し進められ

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

るべき視点について、つぎのような点を強調していたからである。すなわち、フランスの哲学者フーコー Michel Foucault が唱えた「言説 discours, Diskurs」概念を社会学史に応用すること、これである。

フーコーが、一九六九年に著した『知の考古学』の中で提示した「言説」とは、ここでは歴史把握方法のひとつの概念であり、彼にしたがうならば、具体的には、歴史を再構成していくさいに歴史家みずからが主体的に問いかける「資料」を指す。ここでの歴史は、あたかも考古学のごとく、記念物として「資料」を復元させること<sup>(6)</sup>によってはじめて意味を持つ、というものである。ではケスラーは、社会学史的考察のための方法的基盤としての「言説」概念をどのように把握したのであろうか。

ケスラーによるフーコーの「言説」概念は、何よりもまず、「理念史にとつての学問的戦略原理」としてとらえられる。そして「重要な点は、『グループ』、『学派』、『世代』、『運動』の歴史でもなく、統一体とみなされ、『解読さ』れねばならぬところの、ひとつの作品、ひとつの著作、ひとつのテキストに固有に存在する構造である。これらの『資料』は、知の考古学においては、もはや解釈されたりも記憶されたりもせず、『内部から』加工される、すなわち、組みたてられ、解体され、諸層へと分割される<sup>(7)</sup>。ここで究明されるのは、「もろもろの出来事」ではなく、それらの「言語的沈澱」であり、「歴史的『真実』」ではなく、「人間みずからが行ない、そして文書に記録してきたところの『歴史的言説』」である、と受けとめられた。しかし、ここにおいて注意されねばならないと思われる点は、ケスラーがフーコーの「言説」概念を手がかりにして、「言説」を社会学史にとつての分析概念として新たに再構成したことであろう。社会学史への「言説」の応用の方が探られる場合、そこでは二つの視点からの「言説」が考えられなければならない点について、ケスラーは論じる。「社会学は、本質的

には二つの言説として理解される。一方では社会的生活の意味をめぐる言説として、他方では社会科学の認識領域における学問的認識の可能性と限界とをめぐる言説として。これらが社会学史にとって持つ意味は、前者が、『学問』という言説の社会的性格の覆いを取る「ことであるのに対し、後者は、『社会学的な社会学史 soziologische Geschichte der Soziologie』として「出来事、行為、作品」の構造的関係を再構成していくこと」である<sup>(9)</sup>とされる。このような二重の「言説」のうちでも、とりわけ後者の視点は、「社会学は、その時々々の社会的状況を規定するというまさにその理由で、ここでは複合的な見方が必要」<sup>(10)</sup>との意識を前面に押し出すことになる。こうして、ケスラーの言う「社会学的な社会学史」、あるいは、「社会学の社会学」<sup>(11)</sup>への第一歩が踏み出されるのである。

ケスラーは、以上のような社会学史への方法意識にもとづいて、個々の社会学者について、①個人史、②作品、③方法、④今日および将来の社会学にとつての意義、⑤文献、という手順で社会学者の全体像を描き出すことを提案する<sup>(12)</sup>。冒頭で触れた彼のヴェーバー研究も、実のところ、このような社会学史認識についての考察から生み出されたものであって、「入門」と彼自身銘打ちながら、そこには単なる概説書という性格を超えて、社会学史に対するケスラーのこうした独自の方法論が土台になっていたという点には、注意が払われるべきであろう。ヴェーバーの作品や方法を、「事実に即して冷静に検討すること」<sup>(13)</sup>の必要性の強調は、これまでに述べてきたような意味の上で、慎重にとらえなおされねばならないように思われる。

ところで、かのヴェーバー研究において、ケスラーがつぎのような問題意識を表明していたことに、ここでは注目しておきたい。すなわち、ヴェーバー理解のために必要なことは、「ヴェーバーの生涯のみならず、彼の全

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

業績の包括的知識から出発し、これらを社会史のおよび社会学的に、伝統との関連および学派との関連の中へと整理する「ことであり、今までのこうした研究の欠落は、ひとえに「初期ドイツ社会学の発展を、これまで歴史・社会的に分析してこなかったという事実」にある、<sup>(14)</sup>という指摘がそれである。かかるケスラーの問題意識は、時を経るにしたがってより広められ、今世紀はじめからヴァイマル期・ナチス期にいたるまでのドイツ社会学が置かれていた状況の考察にまで発展することになった。

そこで以下では、これ以後のケスラーの所論の展開を跡づけ、それらに内在的検討を加えることを通して、ドイツ社会学史に対する彼の考察の特徴、議論の可能性といった問題に迫りたいと思う。

- (1) Dirk Käsler, *Einführung in das Studium Max Webers*, München 1979 [Abk.: Käsler I], (森岡弘道訳『マックス・ウェーバー その思想と全体像』、三一書房、一九八一年)。
- (2) たとえば、「三上剛史「現象学派とフランクフルト学派」、中 久郎・梶本素久編『社会学ローソク』、御茶の水書房、一九八七年、一九ページ、参照。
- (3) Dirk Käsler (Hrsg.), *Klassiker des soziologischen Denkens*, 1. Bd. (Von Comte bis Durkheim), München 1976; 2. Bd. (Von Weber bis Mannheim), München 1978.
- (4) ここではとりあげられた社会学者と執筆者(括弧内を表記)とを並びのとおりに挙げる。ロンネ (マッキング Masing)、『マックス Karl Marx (マラーヤー著、オットー・ノットヴィッシャー Helmut Dahmer und Helmut Fleischer)』、『マラーヤー Herbert Spencer (マートン Paul Kellermann)』、『パレート Vilfredo Pareto (マートン Piet Tommissen)』、『フランク Ferdinand Tönnies (マートン Alfred Bellebaum)』、『シムメル Georg Simmel (マートン Peter-Ernst Schnabel)』、『デュルケーム Emile Durkheim (マートン René König)』、『デュルケーム George H.

- Mead (マートン) Hans Joss) ヴァーナー Max Weber (マクスウェー) ショーラー Max Scheler (マクサー) Walter L. Bühl) ヴィルヘルム Robert Michels (ロベルト) Wilfried Röhrich) ガイガー Theodor Geiger (テオドール) Paul Trappe) ヤン・ヤン Karl Mannheim (カール) Kurt H. Wolff) シトマン (シトマン) Richard Grathoff) [以下、第二巻]。
- (5) Dirk Käsler, Einleitung, in: Derselbe (Hrsg.), *Klassiker des soziologischen Denkens*, I. Bd. (Von Comte bis Durkheim), München 1976 [Abk.: Käsler II].
- (6) ミシユル・ノーロー、中村雄二郎訳『知の考古学』、河出書房新社、一九八一年、一四一―一六ページ。なお、桑田禮彰『知の考古学』を読む――『歴史家ノーロー』のイメージ――」(桑田禮彰、福井憲彦、山本哲士編『ミシユル・ノーロー 1926―1984』、新評論、一九八四年、所収)を参照。
- (7) Käsler II, S. 12.
- (8) Vgl. ebenda.
- (9) Vgl. ebenda, S. 13.
- (10) Ebenda, S. 14.
- (11) Ebenda, S. 15.
- (12) Ebenda, S. 17.
- (13) Käsler I, S. 5. (前掲訳書『九ページ。ただし、訳語は一部変更した。)
- (14) Ebenda, S. 196. (前掲訳書『二二七ページ。)

## 二 初期ドイツ社会学に対するケスラーの視点

今世紀はじめからヴァイマル期・ナチス期にかけてのドイツ社会学（これをケスラーは初期ドイツ社会学と称する）が置かれていた状況を再考する気運が高まる中で——これは、今次大戦後のドイツ社会学を総括する動き<sup>(1)</sup>と関連しあつて生まれてきたと推測されるが——、ケスラーもまた、彼の問題関心を社会学史の領域へと移行させていった。ケスラーの初期ドイツ社会学史研究が、萌芽的な形ながらも、一九八一年の『ケルン社会学・社会心理学雑誌』の特別号——これはヴァイマル期・ナチス期のドイツ社会学をテーマとしたものであつた——に発表されたことは、こうした気運の高まりと決して無縁ではあるまい。この論文でケスラーが試みたのは、戦前のドイツ社会学会 Deutsche Gesellschaft für Soziologie（一九〇九年設立、一九三四年に活動停止<sup>(3)</sup>）における社会学のとりあげ方を、計七回にわたつて開催された学会大会<sup>(4)</sup>での議論を通して分析することであつた。

この論文においてケスラーが提起したテーマは、「誰によつて、どのような位置が、どのような議論をもつて、方法論の領域で……代表されていたか」というものであつた。そのさい注目されるべきは、彼がこのテーマに迫るために用いた独自の分析枠組みである。ケスラーの提起した問題は、つぎのような枠組みによつて分析される。すなわち、ある社会学の「立脚点」を、そのもつ方法的視角から理念的に類型化する。それは、①自然科学的方向（自然法則観にもとづいた分析。その基本的な働きは、対象を「解明すること」、②精神科学的、または文化科学的的方向（本質法則観にもとづいた分析。その基本的な働きは、対象を「理解すること」）、③社会科学的方向（歴史法則、準法則観にもとづいた分析。その基本的な働きは、「解明」や「理解」を「検証」して予測をたてること）の三つであ

った。ケスラーによれば、①・②が両極端に位置し、③はその中間的位置を占める。考察対象は、①が現実的諸要素であるのに対し、②は理想的諸要素、③は両者の要素である。方法的には、①が原子論であるのに対し、②は全体論、③は弁証法である。またパラダイムとして、①と②がともにモノ・パラダイム的であるのに対し、③はマルチ・パラダイムの、といった具合である<sup>(6)</sup>。

これはきわめて問題索出的な分析枠組みであり、ケスラーはこれを、「イデーングシュタルト Ideengestalt」的方法論的地平<sup>(7)</sup>、と称した。彼の言う「イデーングシュタルト」とは、「社会学が有する内容の次元、学問的特徴」として定義される。さらにここで看過されてはならないのが、彼によって提起された「ゾツィアールゲシュタルト Socialgestalt」という概念である。「ゾツィアールゲシュタルト」とは、「個々の研究者や研究者集団における相互作用のネット、コミュニケーションのネット」として定義されるものである<sup>(8)</sup>。ケスラーがこうした分析枠組みを用いて索出したものこそ、初期ドイツ社会学の性格を代表していた社会学会における、「イデーングシュタルト」と「ゾツィアールゲシュタルト」の絡み合いにはかならなかった。

右のような分析枠組みを用いることによる社会学会の分析から、ケスラーは何を引き出したのであろうか。とりあえずここでは、彼の要約的な結論を再構成しておこう。彼にしたがえば、つぎのようにまとめられる。

(1) いずれの大会においても、さきの三つの主要方向が代表されていた。  
(2) それぞれの大会において、方向に強弱がみられた<sup>(10)</sup>。

(3) 「しかし」一貫して確固たる地位を占めていたのは「自然科学的」で「關係說的 Beziehungswissenschaftlich」な方向であった。人物的にはフェルディナント・ティンニウス Ferdinand Tönnies とヴァーゼ Leopold von Wiese がそれにあたる。

## 西ドイツにおける社会学史研究の一動向

ここでケスラーが浮きぼりにしてみせたのは、社会学会内部の社会学に対する把握の揺れと、それをもたらすところの社会学会の内部構造であったように思われる。ここからわれわれに向かつて発せられた問題は、こうした揺れの構造Ⅱ「イデーングシュタルト」、および内部構造Ⅱ「ゾツィアールゲシュタルト」の関係を、社会学における三つの主要方向からだけでとらえきれるかどうか、という点になるであろう。

その問題について考えるとき、つぎのようなケスラーの示唆は、われわれに有効な視点を提供しているように思われる。すなわち、ケスラーによれば、ドイツ社会学が特殊に理論的に偏向しており、しかも貧弱な経験主義によって方向づけられていた、というとらえ方は支持されえない。むしろ試みられるべきは、「社会全体の過程と、ドイツ社会学内部における論争との間に、社会的かつ知識社会的に入り込むこと」<sup>(11)</sup>である、と。この示唆はとりもなおさず、理論とそれを担う研究者・研究者集団（すなわち、かの「イデーングシュタルト」とそれを支える「ゾツィアールゲシュタルト」）と、それらのまわりをとりまいていた状況との間に存在する関係にこそ、究明の目が向けられるべきであるというケスラーの問題関心を表明するものであったといつてよいであろう。

以上のような点から、とりあえずここでは、こうして形成されたケスラーの問題関心が、第一節でとりあげたヴェーバー研究のための方法的試論とも結びついて、初期ドイツ社会学史への研究展望を広めることになったということに留意し、つぎに、彼の問題関心がどのような形で展開されるにいたったかという点について、その内容を検討することにした。

(11) 一九七九年に『ケルン社会学・社会心理学雑誌』が、その特別号において、つぎのような特集を組んだことは象徴的である。Günther Lüschen (Hrsg.), Deutsche Soziologie seit 1945, Kölner Zeitschrift für Soziologie und



- Sozialpsychologie, Sonderheft 21, Opladen 1979. また「この点については」山本鎮雄『西ドイツ社会学の研究』恒星社厚生閣、一九八六年、第二章、参照。
- (2) Dirk Käsler, Der Streit um die Bestimmung der Soziologie auf den Deutschen Soziologentagen 1910—1930, in: M. Rainer Lepsius (Hrsg.), Soziologie in Deutschland und Österreich 1918—1945, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 23, Opladen 1981 [Abk.: Käsler III].
- (3) ドイツ社会学会の活動について、たゞや、Erhard Stöting, Akademische Soziologie in der Weimarer Republik, Berlin 1986, S. 49—63, 195—220. 参照。
- (4) 社会学会における主要テーマ、時期、場所はつぎのとおりである。
- 第一回大会 社会学の方法と目的（一九一〇年十月、フランクフルト・アム・マイン）
- 第二回大会 国民・人種・文化（一九一二年十月、ヘルリン）
- 第三回大会 革命の本質（一九二二年九月、イエーナ）
- 第四回大会 社会学と社会政策（一九二四年九月、ハイデルベルク）
- 第五回大会 民主主義（一九二六年九月、ヴァイーン）
- 第六回大会 競争（一九二八年九月、チューリッヒ）
- 第七回大会 ジャーナリズムと世論（一九三〇年九月～十月、ヘルリン）
- (5) Käsler III, S. 203.
- (6) Vgl. ebenda, S. 200—202.
- (7) Ebenda, S. 202.
- (8) Vgl. ebenda, S. 199.

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

## 西ドイツにおける社会学史研究の一動向

(9) Vgl. ebenda, S. 239.

(10) ケスラーに依りつつ、この点を各大会についてみておこう。第一回大会では三方向が相対的に同じ強さを持っており、また第二回大会においてもこの三方向の分離はそのままであった (ebenda, S. 207, 209.)。第三・四回大会においてはヴェーゼの「関係説」が強まり (ebenda, S. 239.)、第五・六回大会ではシュマン Ohmar Spann、ゾンバルト Werner Sombart の文化科学的方向が強まるとともに、社会科学的方向がマンハイムによって推し進められた (ebenda, S. 226, 239.)。また第七回大会においては自然科学的方向が強まり、「ケルン学派」と称される「関係説」推進者が優勢を占めた (ebenda, S. 237.)。

(11) Ebenda, S. 241—242.

### 三 ケスラーの社会学史研究

一九八三年にミュンヘン大学社会学部に提出した教授資格論文<sup>(1)</sup>で、ケスラーは、これまでにとりあげたような議論を土台として、より広い視野から社会学史を展望している。これは、第一節の終わりの部分で見たような彼の問題意識——初期ドイツ社会学の発展を歴史的・社会学的に分析するという問題意識——を引き継ぐものであるし、また、第二節で触れた彼の問題関心をさらに広げて考察したものといえる。本節では、この教授資格論文におけるケスラーの考察の広がりを展望することにした。

ケスラーが本論文で考察しようとするのは、今世紀はじめからナチス体制に突入するまでのドイツの社会学者 (オーストリアの社会学者も含む) と彼らの学問、およびそれらをとりとまく状況がどのような関係にあったか、換言すれば、当時のドイツ社会学が社会学者によってどのように規定・把握され、さらにはその規定がどのような要

因にもとづくものであったのか、という点である。以下、ケスラーの主要論点について考察していきたい。

(1) 問題の枠組みと分析

初期ドイツ社会学史を分析するにあたって、ケスラーが設定した問題領域は、当時の社会学者の、①「ゾツィアールゲシュタルト」、②「イデーングeschタルト」、③「ミリュール Milieu」であった。ケスラーによれば、それぞれ具体的には、つぎのような内容で規定された。

①「ゾツィアールゲシュタルト」——研究者の社会組織。ここで提示される分析のディメンションとしては、組織における相互作用のネット（師弟・同僚関係、協力・競争・無視の基準・外部組織・部外者との接触など）とコミュニケーションのネット（継承—受容の基準、共同執筆関係、継続的な一致など）とがある。さらにこれらにフォーマル、インフォーマルな関係を加味して考えると、社会学者集団の凝集構造が浮かびあがる。これによって考察の対象とすべき社会学者の範囲が決定される<sup>(2)</sup>。

②「イデーングeschタルト」——社会学者がそれぞれに有する科学観。科学認識の主要な三類型として、自然科学的認識、社会科学の認識、文化科学的認識が挙げられる。それぞれの認識は、対象、索出的経路、方法的経路、法則概念、パラダイム観などつながっている。これによって、社会学者の「<sup>プロファイル</sup>横顔」や「学派」の比較がなされる。

③「ミリュール」——研究者の出生ミリュール（出自、宗教、地域など）、二次的社會化ミリュール（受けた教育、宗教的傾向、政治的傾向など）、固有のキャリアミリュール（就任大学、担当講座、地位、学外でのキャリアなど）<sup>(3)</sup>。

ところで、「ミリュール」は、これまでのケスラーの論文では十分に展開されていなかった概念であり、ここではじめて具体性をもった新たな概念として導入されている。<sup>(4)</sup>そして、「ミリュール」という概念は、「ゾツィアールゲシュタルト」と「イデーングシュタルト」との絡み合いの中で、よりはっきりととらえられるべきものであった。というのも、ケスラーによれば、「ミリュール」とは、研究者もしくは研究者集団があるテーマを設定するさいに重要な連関をもち、社会学の発展を「操舵し」、さらには特定の思考形態の「文脈」、すなわち「存在被拘束性 Saisverbundenheit」が考慮されるべき概念である、と論じているからである。<sup>(5)</sup>

以上のような問題の枠組みと分析概念を一応提示したケスラーが考察の対象としたのは、ドイツ社会学会であった。ここでの分析は、第二節で検討した彼の論文を基礎として構成されてもいるから、第二節において抽出されたケスラーの問題関心と、この教授資格論文における彼の考察とが重なり合う点について、彼の所論をとりあげることによって彼の視点の発展を確認しておこう。

まず第一の点は、社会学者の「ゾツィアールゲシュタルト」と「イデーングシュタルト」とに関わる議論である。ケスラーが考察したところによれば、社会学会において、終始、中心的な位置を占めていたのはテニエスとヴィーゼであった。<sup>(6)</sup>ケスラーによれば、彼らはいわゆる『自然科学的・関係說的』方向<sup>(7)</sup>を指向しており、こうした指向は一見したところ、政治的諸問題から自由で、純粹に「客観的な」学識であるように思われていた。<sup>(8)</sup>

しかし、第二の論点によって、ケスラーはかかる「ゾツィアールゲシュタルト」と「イデーングシュタルト」の背後にあったものを暴き出している。すなわちそれは、彼らの一貫した「外からの尊敬と承認とを得る戦略」であった。この場合の「外」というのは、社会学者集団外の政治・社会的指導グループを指すのであり、また「尊

敵と承認の獲得」とは、それらグループによって、学科目として正式に大学に社会学の講座を設置させることを意味していた。<sup>(9)</sup> 歴史的にみると、第一次大戦前のドイツにおいては、独立した社会学の講座は大学に開設されておらず、講座開設が表面的に問題になったのはヴァイマル期の教育改革論においてであった。<sup>(10)</sup> こうした状況についてケスラーが指摘したのは、社会学の「尊敵と承認」を得るためにも、社会学会においては政治問題などの現実的問題は、せいぜいのところ付随的にしか取り扱われなかったし、<sup>(11)</sup> 「よりアカデミック」で「現状満足的な、政治に無関心な、非実践的な、そして意義に関する限りにおいて現実から遊離した社会学を代表し、あるいはその撰取に努めていたドイツの社会学者たち」が、社会学会内部で地歩を固めていった、<sup>(12)</sup> という点であり、「そこに『社会学会に』集まった社会学者たちが、いかに『純粹で』『關係說的な』社会学の概念に支配されており、そしてドイツ社会学のこの方向こそが、いかに当時の——とくに政治的な——変化過程の学問的分析と評価から離れていたか」という点であった。つまり、ケスラーにしたがえば、講座設置という形で社会学が「制度化」されるためには、その問題自体が、政治的問題と結びついていたがゆえに、逆に社会学の当事者たちは、政治的・現実的関心を抱くことをせず、受身の姿勢を崩さなかったということである。そこから生じたアカデミズムの現実遊離こそは、まさに「故意の結果」<sup>(13)</sup> である、と彼は言う。

このような二点の指摘が示唆していることは、一見したところ独自の固有な構造を持っていると思われるがちな、ある科学者集団（ここでは社会学者集団）の「ゾツィアルゲシュタルト」・「イデーングシュタルト」は、実際には、それをとりまく外部的状况に制約されざるをえないということである。そして、ケスラーによる「ミリュール」概念からすれば、「外部的状况」とここで言ったものこそ、その「ミリュール」にほかならない。したがっ

## 西ドイツにおける社会学史研究の一動向

てここでは、いままで検討してきた問題についてつぎのように言うことができるであろう。すなわち、社会学者集団における「ゾツィアールゲシュタルト」・「イデーングゲシュタルト」は、「ミリュール」に制約される、と。

### (2)知識人の実態と「ミリュール」

ところで、初期ドイツ社会学を考察する場合の以上のような複合的視角について、その一要素である外部状況的「ミリュール」を強調するだけでは、いまだに初期ドイツ社会学史像は浮かんでこない。「外部」に対して「内部」、すなわち、社会学者自身の精神態度はどうであったのか、という問題がつきに生じてくるように思われる。ケスラーはこの点について、社会学者を知識人の構成員としてとらえ、その階層に特有な精神態度を「ミリュール」論の中に組み入れようと試みている。この点に関する彼の議論を、以下では展望することにした。

ドイツの社会学者については、さまざまな視点からのとりあげ方が可能であろうが、ケスラーが注目したのは、近代化と知識人とをめぐる議論であった。「近代化」という概念は、もともと歴史学で用いられる概念であるが、近代化がドイツの知識人にどのような影響を与えたかについての諸議論を、ケスラーは、ツァプフ Wolfgang Zapf、タンネンバウム Edward R. Tannenbaum、ヴェーラー Hans-Ulrich Wehler、ニッペンター Thomas Nipperdey、フャウレンツァン Bernd Faulenbachらに即して検討している。そこでケスラーが問題にしたのは、「ドイツにおける社会学の発展は、ドイツの、<sup>(16)</sup>達成されなかった……近代化と関係していたのかどうか、そしてどのような点でそうであったのか」という点であった。これに対してケスラーは、ドイツの社会学者は、「知識人として、ドイツの工業化、現われつつあった社会的変化、『基本的な政治化』、市民層の意義、ドイツの

国家思想、議會主義、民主主義、ヴァイマル共和国のそれぞれに対して立場を抱いていた<sup>(17)</sup>ととらえた。しかしこうしたことは、ドイツの社会学者に限ったことではなく、当時の知識人一般にもあてはまるといえる。そういった点から知識人へと考察を広げる場合、そこに見出せるのは、近代化が知識人の内部構造を変えていったという事実である。このことについてケスラーはつぎのような点から論じた。

市民層の歴史の大部分が社会学の歴史に映し出されているという一般的主張に対し、ケスラーが規定した市民層とは、均質で単一の市民層ではなく、「教養市民層 Bildungsbürgertum」と「有産市民層 Besitzbürgertum」という二つに類型化された市民層であった<sup>(18)</sup>。すなわち、大学教授・高校教師・学者・高級官僚等々といった教養市民層と、工場主・小工業者・商人等々といった有産市民層とがそれである<sup>(19)</sup>。一般に、前者はますます政治的機能から離れていく傾向が強かったのに対し、後者は利害を担う政党への指向が強かった<sup>(20)</sup>。具体的な数字で見ると、プロセインにおける大学教授の出身階層について、一八八五年と一九三五年とを比較した場合、教養市民層出身者は六二パーセントから四八パーセントに減少したのに対し、有産市民層出身者は二五パーセントから四〇パーセントへと増加していた<sup>(21)</sup>。社会学者に関してもこのような傾向が強まり、有産市民層出身者が増えてきた<sup>(22)</sup>。また、ドイツの学者を「マンダリン Mandarin」という形で理念型化したリンガー Fritz K. Ringer は、学者を「正統派 Orthodoxy」と「近代派 Modernism」とに分け、「近代ドイツ社会学」を、現実適応的であった「近代派」の所産として位置づけた<sup>(24)</sup>。

これらの議論はいずれも、ケスラーが指摘した初期ドイツ社会学者の指向と逆の現象であり、また解釈であった。というのも、ケスラーは、社会学者における社会学者たちの「脱政治化」<sup>(25)</sup>について語り、初期ドイツ社会学

### 西ドイツにおける社会学史研究の一動向

の「現状満足的な」、「政治的に無関心な」、「非実践的な」、「現実から遊離した」姿を描き出していたからである。もしもさきの市民層類型にしたがうならば、有産市民層出身者の占める割合が増えてきた社会学者集団は、当然に政治を指向し、またリンガーの言うように、現実適応的傾向が出てきて当然ではなかったか、という疑問がここで生じるであろう。

こうした疑問に対するケスラーの考察はつぎのようなものであった。とくに有産市民層出身の社会学者たち<sup>(26)</sup>は、自分たちがアカデミックな面で社会化する間に、「異常なほど高度に、これら「教養市民層」の『精神貴族主義』の理念や『心性』に適合していった」。しかもこうした適合は、教養市民層の社会的・経済的な特権がますますなくなった時期であった<sup>(27)</sup>、と。

考察の対象として選び出された四九人の社会学者について、ケスラーは、①有産市民層出身者であるか否か、②ユダヤ人であるか否か、③社会主義者であるか否か、④世代別にコーホート分類すればどうなるか、という観点から実証的分析を試みたが、ここまでのケスラーの議論は、①について検討する結果になった。これは、「ミリュール」における出自の一要素について論じたものにすぎないが、社会学者の個別的な「ミリュール」が、思考様式や精神態度に影響する点を強調することになったのである<sup>(29)</sup>。

### (3) 「政治文化」と「ミリュール」

ここまででは、初期ドイツ社会学を制約する要因としての「ミリュール」に注目してきたが、最後に、社会学を制約してきたもうひとつの要因について、ケスラーが論ずるところを見ておきたい。それは、ケスラーによって「政



治文化 *politische Kultur*」と規定されるもので、もともととはゾントハイマー Kurt Sontheimer が用いた概念を、ケスラーが援用し、社会学的な概念に構成しなおしたものである。「政治文化」とは、ケスラーによれば、「政治秩序と、政治によって克服されるべき基本問題と関連する人々の支配的な考え方、態度」<sup>(30)</sup>であり、「伝統」として理解されるものである。ケスラーによれば、当時の社会学者もまた、その「伝統」から免れることができなかった。その「伝統」とは、社会学者にみられた①非政治的伝統、②ドイツ理念主義の伝統、③紛争回避の伝統、である。「非政治的伝統」とは、政党の政策や国政から一定の距離を保とうとする姿勢であり、ケスラーによれば、当時の社会学者の主要部分はこの伝統に縛られていたという。「ドイツ理念主義の伝統」とは、「ある理想的な基準で、眼前の政治的・社会的状態を測定し、現状に対して多かれ少なかれ厳しい判断に立つ思考態度」であり、ドイツの社会学者は、「このドイツ的『理念主義』に刻印されていた」。「紛争回避の伝統」の意味は、「ドイツ人は調和への望みや国民のゲマインシャフト的結合を、公正な競争やオープンな競争よりはるかに優先させていた」ということであり、ここに社会学者たちは中心的な意義を認めていたという。<sup>(31)</sup>

当時の社会学者たちが、こうした諸伝統から解放されていなかったとすれば、それは社会学者の思考様式・行動様式をも制約することになるであろう。したがって社会学は、今度は「伝統」によっても拘束されることになる。

しかし、この「伝統」もまた、そのような意味からすれば、これまでに論じてきた「ミリュール」にほかならない。ケスラーによってさまざまに論じられたのは、社会学者と彼らの社会学を制約・拘束する作用をもつ「ミリュール」なのであり、それと「ゾツィアールゲシュユタルト」・「イデーニングゲシュユタルト」との相互的な作用であった。

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

社会学の歴史は、これらの相互作用の中ではじめてその意味を問うことができるし、そのために社会学史分析の方法は包括的で、体系性を持ったものでなければならなかったのである。

(1) Dirk Käsler, Die frühe deutsche Soziologie 1909 bis 1934 und ihre Entstehungs-Milieus. Eine wissenschaftssoziologische Untersuchung, Opladen 1984 [Abk.: Käsler IV].

(2) Vgl. ebenda, S. 8—12. 以下「た観点」および「ケスラー」は、社会学会員一七名の中から四九名の社会学者を選び出し、彼が称するところの「相対的な凝集のゾーン」を提示した。これによれば、社会学会の「核 Kern」は、カッセルハイマー Franz Oppenheimer、シンメルト、テヒエンス、M・ヴェーバー、ヴィーゼの五人であり、その同心円的構造を、「核」から外に向かつて順に、「内縁 Inner Rand」、「外縁 Äußerer Rand」、「縁辺 Peripherie」とした (ebenda, S. 42—44)。この構造は、学会員が社会学会大会においてただけ発言し、ただけ名が挙げられたかなどの頻度により分類したもので、「内縁」一一四名、「外縁」一一四名、「縁辺」一一六名の社会学者より成る構造である。この具体的手続をたづねば、ebenda, S. 30—42. 参照。なお、かかる手続を「資料操作方法に対する疑問を提示したサナーナー Heinz Sahner の書評が参照。Vgl. Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 38. Jg., 1. H., 1986, S. 170—173.

(3) Vgl. Käsler IV, S. 15—22.

(4) 「「ミッラー」については」学問の特殊化に関する今日までの社会学的研究において、おそらく検討されなかつた、いやそれどころか、ほとんどの場合、考えられることもなかつた」とケスラーは述べている。Ebenda, S. 25.

(5) Ebenda, S. 29.

(6) Ebenda, S. 59. 社会学会大会での議論を通してこのことを確認しておこう。テヒエンスは、第一回大会で幹事に選出された (Verhandlungen des Ersten Deutschen Soziologentages vom 19.—22. Oktober 1910 in Frankfurt a. M.,

Frankfurt am Main 1969, S. IX.)。第一討論の議長をひとめるとともに「社会学の方途と目的」と題して報告を行つた( ebenda, S. 17 ff.)。第二回大会でもついでやはり第一討論の議長をひとめつた( Verhandlungen des Zweiten Deutschen Soziologentages vom 20. - 22. Oktober 1912 in Berlin, Frankfurt am Main 1969, S. VII, 49 ff.)。第三回大会でもついでニコロスは社会学学会長に就任( Verhandlungen des Dritten Deutschen Soziologentages am 24. und 25. September 1922 in Jena, Frankfurt am Main 1969, S. 56.)。開会の辞を述べた( ebenda, S. 11 ff.)。他方、ヴァーゼはこの大会で学会事務局入りし、学会誌の編集長に選出されることとした( ebenda, S. 56.)。「革命の社会学の問題点」と題して報告を行った( ebenda, S. 6 ff.)。ニコロスは第三回大会以降、社会学学会長として大会ごとに関会の辞を述べており、ヴァーゼは第四回大会議書に「はしがき」を書いて以来、第七回大会まで議書に「はしがき」を書いている。第四回大会でおつて両者は報告してこないが、第五回大会ではニコロスが「民主主義」をテーマとして、ケルゼン Hans Kelsen とともに主報告を行つた( Verhandlungen des Fünften Deutschen Soziologentages vom 26. bis 29. September 1926 in Wien, Frankfurt am Main 1969, S. 12 ff.)。また本大会でもついでヴァーゼは「関係説の分科会」で「関係説の課題と方法」と題して報告した( ebenda, S. 192 ff.)。第六回大会ではヴァーゼが「マンハイム」とも「競争」というテーマについて主報告者として登場した( Verhandlungen des Sechsten Deutschen Soziologentages vom 17. bis 19. September 1928 in Zürich, Vaduz 1977, S. 15 ff.)。第七回大会でもついで、ニコロスは社会誌学の分科会に報告し( Verhandlungen des Siebten Deutschen Soziologentages vom 28. September bis 1. Oktober 1930 in Berlin, Glaschütten im Taunus 1974, S. 196 ff.)。またヴァーゼも芸術社会学の分科会に「芸術社会学の問題領域についての方法的なるもの」と題して報告した( ebenda, S. 121 ff.)。

(7) Käsler IV, S. 71.

西アインツにおちる社会学史研究の一動向

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

- (8) Ehbenda, S. 52.
- (9) Ehbenda.
- (10) 一九一九年、当時プロイセンの文部大臣であったヴァッカー Carl Heinrich Becker が『大学改革についての構想』(Carl Heinrich Becker, Gedanken zur Hochschulreform, Leipzig 1919.) の中で、社会学を「伝承されている学科における知識と学説の特殊化を克服するものとして位置つけた。「このうち、それ〔社会学〕は総合からのみ構成されているからである。それはわれわれにとって、教育手段としてますます重要になってきている。社会学の講座はすべての大学にとって、緊急に必要なものである。そのさう社会学は、政治学や現代史をも含めた、言葉の広い意味で考えられるべきである」(ヴァッカー)。M. Rainer Lepsius, Die Soziologie der Zwischenkriegszeit: Entwicklungstendenzen und Beurteilungskriterien, in: Derselbe (Hrsg.), Soziologie in Deutschland und Österreich 1918—1945, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 23, Opladen 1981, S. 11. また、当時の教育改革論については、ホルムート・シヘルスキー、田中昭徳・阿部謙也・中川勇治訳『大学の孤独と自由 ドイツの大学ならびにその改革の理念と形態』、未来社、一九七〇年、二二三—二三六ページ、参照。
- (11) Kasler IV, S. 68.
- (12) Ehbenda, S. 77.
- (13) 「純粋社会学 Reine Soziologie」とは、第四回社会学大会で出された新たなカテゴリーで、シムネルの「形式社会学 die formale Soziologie」やチャーマの「関係説」に反してつくられた名称である。Kasler III, S. 220.
- (14) Kasler IV, S. 81.
- (15) Ehbenda, S. 68.

- (16) Ebenda, S. 214.
- (17) Ebenda, S. 234.
- (18) Ebenda, S. 241.
- (19) Ebenda, S. 282.
- (20) Ebenda, S. 288.
- (21) Ebenda, S. 282.
- (22) Ebenda, S. 288. 具体的分析については、ebenda, S. 337—342. 参照。
- (23) 「マンダリン」という語は、M・ヴェーバーが中国の文官にたいして用いた用語で、リンガーはこれをドイツの知識人に適用して「世襲権や世襲財産とは異なった、第一義的に教育資格にその地位を負う社会的および文化的エリート」を定義している。Fritz K. Ringer, *The Decline of the German Mandarins. The German Academic Community, 1890—1933*, Harvard University Press, 1969, p. 5.
- (24) Käsler IV, S. 271.
- (25) Ebenda, S. 48.
- (26) ケスラーが考察の対象とした四九人の社会学者のうち、有産市民層出身者は一九人(三八・七パーセント)、教養市民層出身者は一五人(三〇・六パーセント)であった。Ebenda, S. 339.
- (27) Ebenda, 288.
- (28) Ebenda, S. 332—476.
- (29) とくに①～③の分析について、ケスラーが指摘しているのは、初期ドイツ社会学の社会的分析にとつてのその解明度の大ききであり、経験的結果として、社会学者たちの「ミリュエ」の多様性であった。Ebenda, S. 446.

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

(30) Ebenda, S. 535.

(31) Ebenda, S. 537, 539, 542.

#### 四 ケスラーの社会学史研究の位置

以上、ケスラーの所論について、彼の社会学史への問題関心の所在と展開とを中心に考察を試みてきたが、なお残されている第一の論点は、彼の議論が社会学史上、どのような位置を占めているかという点である。この点を明らかにするために、最後に、従来のドイツ社会学史研究が抱いてきたさまざまな観点をケスラーに依拠して整理しておく必要がある。

ケスラーは、初期ドイツ社会学史に関する従来の研究を、それぞれが立脚する観点から六つに類型化し、多数の文献を網羅的にとりあげて検討を試みている。ただし、彼は各類型について、必ずしも総括的に論じているわけではないから、ここではそれぞれに見い出される立場の特徴をまとめなおし、あわせてそれらに対するケスラーの評価にも触れておこう。ケスラーによれば、従来の社会学史は、

(1) 「代表的社会学者の歴史」としての社会学史(代表的社会学者に焦点をあて、学説の展開を追うという観点から構成される社会学史)、

(2) 「学派の歴史」としての社会学史(学派分類をし、各学派の学説を追うという観点から構成される社会学史)、

(3) 「理念の歴史」としての社会学史(理念や学説の連続性という観点から構成される社会学史)、

(4) 「学問の歴史」としての社会学史(学科目としての社会学史に対して、その展開をとらえるという観点から構成される社会学史)

会学史)。

(5)「ポエーテ Pointe と結びつく歴史」としての社会学史(社会学がその時々において、どのような結果をもたらしたかを考察するという観点から構成される社会学史)。

(6)「ミリュエーの歴史」としての社会学史(何らかのコンテクストから社会学説の展開をとらえるという観点にもとづいて構成される社会学史)。

に分類された<sup>(1)</sup>。これらについてケスラーは、その社会学史分析の基本的視角である「ゾツィアールゲシュタルト」・「イデーニングシュタルト」・「ミリュエー」を評価の基準として比較検討している。

ケスラーは、彼の基本視角から遠いものとして、(1)・(2)・(3)を退け、<sup>(2)</sup>(5)については視角の有効性を認めつつも、議論の「短絡」という点で批判した。<sup>(3)</sup>また、(6)についてはその議論の発展可能性を示唆することとどめてい<sup>(4)</sup>る。これらに対し、ケスラーが多くの点で同意したのが(4)であるといえよう。その中でも、社会学、社会問題、

市民層の間の関係を、歴史・社会的状況の中からとらえようとしたベンディクス Reinhard Bendix の研究に<sup>(5)</sup>ついて、ケスラーは、「われわれの独自の意図を明確化するのに役立つ」と述べ、また、シルズ Edward A. Shils

が提起した、<sup>(7)</sup>学科学目の「制度」、あるいは「制度化」の問題と、研究者の「生態学(アカデミックなシステムの中、あるいは上位の文化伝統の中に科学者が組み入れられる過程についてとり扱うこと)」<sup>(8)</sup>の問題について、ケスラーは、「き

わめて魅力的な説明の試み」<sup>(9)</sup>と評価した。さらにシルズの議論に関して、ケスラーは、シルズが学科学目の中に「社会的で精神的な構造」を見出していること、それに加えてシルズが「外からの刺激」について語っていることを指摘し、これらがケスラーの論じる「ゾツィアールゲシュタルト」・「イデーニングシュタルト」・「ミリュエー」

にはかならないと述べているのである。<sup>(10)</sup>「われわれは、初期ドイツ社会学の社会学的分析という独自の試みにあたり、シルズの方法論的提起によって……手がかりが与えられることになろう」というケスラーの一文は、シルズに代表される「学問の歴史」の方法に、ケスラーが注目していたことをよくあらわしている。

つぎに、論じられるべき第二の点は、ケスラーのこうした議論の組み立て方であろう。ケスラーは、自分の議論が(4)に依拠しているなどとは決して言っているのではなく、あくまでも彼の議論が(4)の要素をすべて包含し、かつ、(5)・(6)をも修正しつつ取り込んでいることを言っているのである。したがって、ケスラーの力点は、社会学史の包括的・体系的な解明の方法に置かれることになる。つまり、「初期ドイツ社会学を——ゾツィアールゲシュタルト・イデーニングゲシュタルト・ミリューに分けて分析的に——社会全体と絡み合った体系としてとり扱う<sup>(12)</sup>」という方法がそれである。

しかしながら、ここから若干の問題点が導き出せることを指摘しておきたい。それは、社会学史をかかる方法で把握するがゆえに生じてくる問題である。ケスラーの方法は、たしかに、初期ドイツ社会学の体系的解明をもつて社会学史の構成をめざしてはいたが、社会学の理論・学説自体は、「イデーニングゲシュタルト」におけるかの「方向」の適用により、従属変数としてとらえられる。その結果、個別的な社会学理論・学説の特異性や独自性は把握されえないことになる。ここで、ケスラーの問題関心の起点を思いおこす必要がある。いま、彼の三つの分析概念を彼のヴェーバー研究<sup>(13)</sup>にあてはめて考えてみると、彼はヴェーバーの全体像を、「生涯」、「業績」、「方法」、「存命中の学問的意義」の順で論じたが、「ゾツィアールゲシュタルト」は「存命中の学問的意義」に、「イデーニングゲシュタルト」は「方法」に、そして「ミリュー」は「生涯」に対応することが、その内容からも確



認できる。とすれば、「業績」はこの分析概念から抜け落ちてしまうことになる。もちろんこれは、一人の社会学者についての分析であって、社会学史についての分析ではないが、この視点の欠落は、彼が実際に初期ドイツ社会学を分析したときにはっきりと現われてくる。はたして、ケスラーの議論の展開過程において、この点は後退なのであるか、留保なのであるか、それともまったく別の次元の問題なのであるか。その点に関して、ケスラーは明言していないが、この問題は再考されるべき問題として、われわれの前に立ち現われてくるように思われる。

最後に第三の論点として挙げられるのは、ケスラーが対象とした初期ドイツ社会学だけでなく、ドイツ社会学の他の時期、あるいは他国の社会学にもその方法が適用され、検証されるべきではないかという点である。後者の点については、すでに彼自身、問題提起をしていたが、その成果はいまだ発表されていないようである。前者の点については、第二節のはじめでわずかに触れた問題——戦前・ナチス期・戦後社会学の関連性の問題——と結びつく。そのさい彼の、「政治文化」概念をも含めた「ミリュール」論は、ナチズムの強権的な支配を経て再生した現代ドイツ社会学の性格分析にも新たな光をあてることになる。彼の教授資格論文におけるドイツ社会学史研究では、初期ドイツ社会学とナチス期および現代社会学との関連には言及されていなかったが、ケスラーがかかる問題関心を抱いていることはすでに表明しているし、また、そのような観点からドイツ社会学を検討する機は十分に熟しているのである。<sup>(16)</sup>

以上、ここでは、第一にケスラーの社会学史の方法の特徴、第二にその方法の限界、第三に今後の社会学史研究の発展の可能性のそれぞれについて、ケスラーの所論に検討を加えてきた。今後のわれわれの課題は、ケスラ

西ドイツにおける社会学史研究の一動向

一の所論から導き出されたこれらの点に関し、視野を拡大・深化させて、ドイツ社会学史をとらえるという点にあるといえるであろう。

(1) Kasler IV, Kap. C.

(2) (1)と(3)について、ケスラーは、「社会学のイデーングェシュタルトをとり扱うだけ、あるいは、多くの選り出された社会学の『巨匠』をとり扱うだけでは、ききに挙げた三つの研究次元のもとの複雑な相互関係が見失われてしまう」と述べている(ebenda, S. 131.)。また、(2)については、「学派」の概念自体が疑しく、多義的であって、何ら説得力を持たないこと、あるいは一例として挙げられた段階論的分析(社会学者を、先駆者―礎を築いた人々、の二段階に分けてとらえるもの)は、「三つの研究次元には役立たないこと」が論じられている(Vgl. ebenda, S. 114, 123-124.)。なお、リッポングラウ「三つの研究次元」とは、「ソツィアールゲシュタルト」、「イデーングェシュタルト」、「リッター」の三つである。

(3) ノカーチ Georg Lukacs の議論を代表的な一例として挙げれば、ドイツ社会学は、「非理性主義」の一環であることは「帝国主義的金融資本の先手」としてとらえられる。こうしたとらえ方は、ケスラーによれば、「まったくのイデオロギー的「短絡」である」という。Vgl. ebenda, S. 185.

(4) Vgl. ebenda, S. 192-197.

(5) リッポングラウの「ソツィアールゲシュタルトの研究は」の未刊行論文である。Reinhard Bendix, The Rise and Acceptance of German Sociology. M. A.-Thesis, Dept. of Sociology, University of Chicago, 1943.

(6) Kasler IV, S. 138.

(7) リッポングラウの「ソツィアールゲシュタルトの研究は」の未刊行論文である。Edward A. Shils, Geschichte der Soziologie: Tradition, Ökologie und Institutionalisierung, in: Talcott Parsons, E. A. Shils u. Paul F. Lazarsfeld, Soziologie -

autobiographisch. Drei Kritische Berichte zur Entwicklung einer Wissenschaft, Stuttgart 1975.

- (8) Käsler IV, S. 143—144.
- (9) Ebenda, S. 145.
- (10) Vgl. ebenda, S. 147.
- (11) Ebenda, S. 147—148.
- (12) Ebenda, S. 214.
- (13) Käsler I.
- (14) Vgl. Käsler III, S. 242.
- (15) Vgl. Käsler IV, S. 3—4.
- (16) 本稿第二節「注(一)」参照。

付記 本論文は昭和六十二年度成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。